

【特集】

## ウォーターフロント・シティ横浜 みなとみらいの誕生



ご自由にお持ちください

【展示余話】

## 企画展「ようこそ！横浜地図ワールドへ」より 「大日本職業別明細図 横浜市神奈川区」

【資料紹介】

## 陸軍衛生兵の従軍関係資料

横浜都市発展記念館

ハマ発 NEWSLETTER 第29号 2017(平成29)年10月7日発行(年2回発行・不定期)  
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜ふるさと歴史財団 〒223-0021 横浜市中区日本大通12 TEL. 045(663)2424 FAX. 045(663)2453  
題字/ロゴ/高橋健介 印刷/製本/神奈川新聞社 本誌からの無断転載を禁止します。

### EXHIBITION

企画展のご案内



## ウォーターフロント・シティ横浜 みなとみらいの誕生

昭和40(1965)年、横浜市はあらたな都市づくりの構想として「六大事業」を発表しますが、そのひとつが都心部強化事業でした。これは開港以来の都心部であった関内地区と、戦後急速に発達した横浜駅周辺地区とを、臨海部の再開発によって一体化しようとするもので、この構想をきっかけに、当時造船所や貨物ヤードが広がっていた臨海部は、新都心「みなとみらい」として大きく姿を変えていきます。

本展示では、明治の横浜船渠(ドック)設立から平成の横浜ランドマークタワー建設まで、みなとみらい誕生にいたるウォーターフロントの変遷をたどります。

【会期】2017(平成29)年10月7日(土)  
～2018(平成30)年1月8日(月・祝)

【図録】『ウォーターフロント・シティ横浜 みなとみらいの誕生』  
横浜都市発展記念館/編

### 寄贈・寄託資料の紹介

平成29年4月から8月までに受贈した資料です。(敬称略)

寄贈資料名	点数	寄贈者
武相高校関係ほか個人所蔵資料(一括)	27	柏倉幸男
小島武雄従軍関係資料(一括)	53	岩田みどり
横浜どんたく、みなとみらい21イベント関係資料(一括)	140	齋藤孝



●表紙図版  
都心臨海部イメージスケッチ  
1980(昭和55)年頃  
文化庁国立近代建築史料館所蔵

### MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

- 刊行物
- 『ようこそ！横浜地図ワールドへーまちの移りかわりが見えてくるー』①  
横浜都市発展記念館/編 定価1,600円+税
  - 『焼け跡に手を差し伸べてー戦後復興と救済の軌跡ー』②  
横浜都市発展記念館/編 定価1,000円+税
  - 『横浜・山下公園ー海辺に刻まれた街の記憶ー』③  
横浜都市発展記念館/編 定価880円+税
  - 『目で見える「都市横浜」のあゆみ』  
横浜都市発展記念館/編 定価1,239円+税

- DVD
- 『映像でたどる昭和の横浜』シリーズ  
定価各1,429円+税  
第1巻・港とまちづくり 第2巻・都市の交通 第3巻・子どもたち



①ようこそ！  
横浜地図ワールドへ



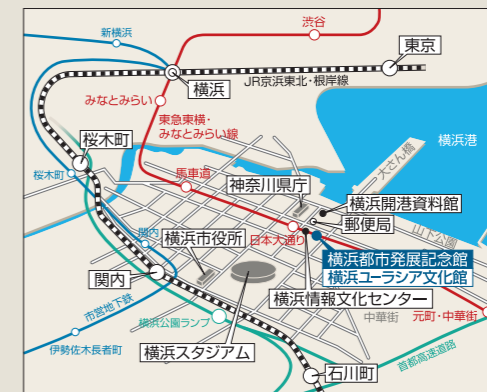
②焼け跡に  
手を差し伸べて



③横浜・山下公園

### 横浜都市発展記念館 利用案内

- 開館時間  
午前9時30分～午後5時  
2017.11/3,12/23,2018.1/8は午後7時まで  
(券売は閉館30分前まで)
- 休館日  
毎週月曜日・年末年始ほか  
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)
- 観覧料  
上記企画展開催期間  
企画展 一般300円 小・中学生150円  
(企画展の入館券で常設展もご覧いただけます。)  
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円  
それ以外の期間  
常設展のみ 一般200円 小・中学生100円  
●毎週土曜日は小・中・高校生無料  
●「濱ともカード」「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」  
などをお持ちの方は、無料です。
- ホームページ  
<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>



#### 交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分
- あかいづつバス「日本大通り」下車徒歩1分

※本誌は当館ホームページでも  
ご覧いただけます。



編集後記  
みなとみらい21地区は首都圏の住みたい街として人気が高く、最近では「横浜と言えばみなとみらい」とされるほどです。そんな注目度の高いこのエリアがどのような歴史を経て誕生したのか、今号の特集では詳しく取り上げました。企画展とあわせてぜひご覧ください。(岡)

◎次号発行予定 平成30年4月上旬



# ウォーターフロント・シティ横浜 みなとみらいの誕生

## 飛鳥田市長と六大事業

昭和40(1965)年、横浜市長飛鳥田雄はあらたな都市づくりの構想として「六大事業」を発表した。これは互いに関連しあう6つの都市整備事業を通じて、横浜の都市構造を将来に向けてより強固にしようとするもので、

- (1) 都心部強化事業
- (2) 金沢地先埋立事業
- (3) 港北ニュータウン建設事業
- (4) 高速道路網建設事業
- (5) 高速鉄道(地下鉄)建設事業
- (6) ベイブリッジ建設事業

から構成されていた。前3者が都市の全体構造にバランスをもたらすための計画だとすれば、後3者は都市全体の循環機能を向上させるための計画だといえる。

この六大事業の筆頭に挙げられていたのが、都心部強化事業である。当時の横浜は、開港以来の都心部であった関内・伊勢佐木町地区と、戦後急速に発達した横浜駅周辺地区とで、中心市街地が二つに分断されており、そのあいだには三菱重工業の横浜

造船所や国鉄の貨物ヤードなどが広がっていた(1)。都心部強化事業は、これら現役の施設を移転させて跡地を再開発し、横浜駅から関内地区へと連続するあらたな都心を形成しようというもので(2)、この構想をきっかけに、のちに「みなとみらい21」と呼ばれる都心臨海部の整備事業がスタートする。

## 長引く移転交渉

臨海部の再開発にあたって最大の焦点は、三菱重工業横浜造船所の移転問題であった。昭和42(1967)年12月、飛鳥田市長は三菱重工業の河野文彦社長に対して、造船所の移転について最初の打診をおこなった。当時の造船業界の大型船ブームを受けて、三菱重工業の内部でも横浜造船所の狭隘化は問題となっており、本牧工場の地先を埋め立てて移転する計画が検討されていたときであった。

昭和44(1969)年2月、飛鳥田は三菱重工業の古賀繁副社長、三菱地所の渡辺武次郎社長らを招いて、正式に造船所の全面移転と跡地再開発について申し入れを行った。造船事業からの撤退を決断した三菱重工業、跡地開発を担当する三菱地所、そして横浜市とのあいだで、横浜造船所の移転に関する協定が締結された。長きにわたって関係者が交渉と検討を重ねてきた都心臨海部整備事業は、ようやく実施に向けた準備が整った。

## 「みなとみらい21」の始動

造船所の移転が決まった三菱重工業では、昭和56(1981)年4月8日、移転先である金沢工場の建設用地で総合起工式がおこなわれた。この年、都心臨海部総合整備計画の愛称が募集され、2千件を超

た。移転後の跡地については、横浜市が買収するのではなく、三菱地所が「市民のための町並みとなるよう」再開発にあたってほしいというのが、飛鳥田が出した条件であった。その後、六大事業のひとつとして埋め立てが進められていた金沢地先に移転先を絞って、横浜市と三菱重工業との交渉が進められるが、昭和48(1973)年のオイルショックに端を発する造船業界の深刻な不況により状況は一変し、用地の売買交渉は難航をきわめた。

昭和51(1976)3月、横浜市と三菱重工業とのあいだで、2年後までに用地売買の本契約を結ぶ内容の協定が締結されたものの、その後も状況は悪化の一途をたどり、同53(1978)年3月、本契約締結をさらに2年延期することで両者は合意した。飛鳥田は任期半ばで社会党委員長へと転任し、都心臨海部のプロジェクトは同年4月に就任した新市長の細郷道一へと引き継がれた。

える応募のなかから、29歳の男性による案「みなとみらい21」に決定した。

翌57(1982)年8月、横浜工場からの移転作業が始まり、同年12月5日には横浜工場の閉所式がおこなわれた。そして翌58(1983)年3月18日、金沢工場において総合起工式が挙行され、造船所の移転事業が完了した。

同年11月、みなとみらい21事業の起工式がおこなわれ、埋め立て事業が始まった。飛鳥田市長による構想発表から18年あまり、新都心を創造する壮大な都市づくりのプロジェクトがここに始動した。

(青木 祐介)



1 埋め立て前の都心臨海部 『都心臨海部総合整備基本計画(中間案)』(昭和56年)より

## 基本構想の検討

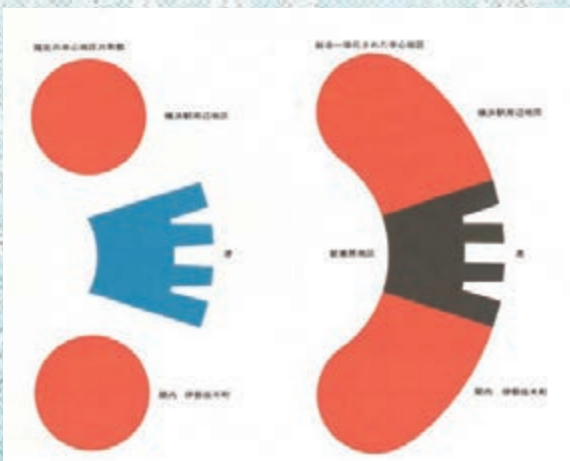
細郷新市長は、あらたに運輸省や建設省などの関係省庁を交えて、土木工学の八十島義之助を委員長とした「都心臨海部総合整備計画調査委員会」を発足させた。国から調査費を得て進められた同委員会での検討を経て、横浜市は昭和56(1981)年に「都心臨海部総合整備基本計画」を発表した(3)。

計画範囲は、新港埠頭から横浜駅東口にいたる既存の約110haの土地に、その前面の新規埋立地70haを加えた計180haのエリアで、都心機能と港湾機能を融合させた



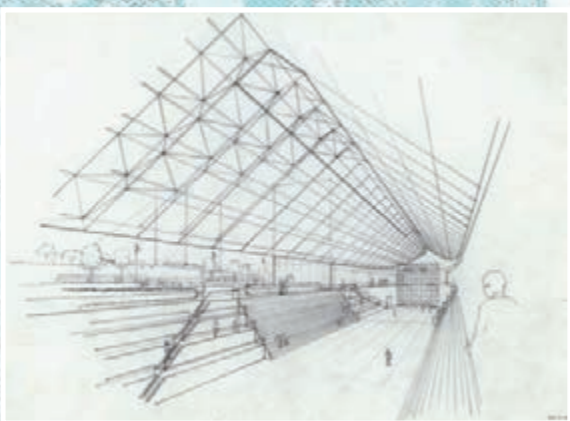
3 都心臨海部総合整備基本構想図

『都心臨海部総合整備計画 21世紀への都市づくり』(昭和56年)より



2 都心部強化事業概念図

『横浜の都市づくり 市民がつくる横浜の未来』(昭和40年)より



4 石造ドック活用イメージスケッチ

昭和55(1980)年頃 文化庁国立近代建築資料館所蔵



6 埋め立てがすすむみなとみらい21地区

昭和60(1985)年 横浜市史資料室所蔵(広報課資料)

# 展示 余話

## 企画展「ようこそ！横浜地図ワールドへ」より 未公開資料の紹介

# 「大日本職業別明細図 横浜市神奈川区」

市街地の商店や工場、事務所などの名称を記載した民間作成の明細地図を「商工地図」と呼ぶ。大正期には全国の各都市でその作成が見られ、昭和戦前期には東京交通社の「大日本職業別明細図」シリーズのように全国展開をするものも登場した。

「大日本職業別明細図」のシリーズで、現在の横浜市区を対象として発行されたものは下表の通りである(ただし、この全てが現在、公的な施設等で所蔵され閲覧が可能であるとは限らない)。

先般終了した当館企画展「ようこそ！横浜地図ワールドへ」では、(b)と(h)の図の現物を展示した(いずれも横浜開港資料館所蔵。なお、(h)については原寸大の複製版も制作し、引き続き販売している)。実はそれ以外に、(f)の図についても、個人所蔵の現物を拝借し展示する予定

- (a) 「保土ヶ谷町・戸塚町・藤沢町・平塚町・厚木町(・他)」(1921年および1925年)
  - (b) 「田島町・鶴見町」(1926年)
  - (c) 「横浜市鶴見区・神奈川区・保土ヶ谷区」(1931年)
  - (d) 「鎌倉町・藤沢町・逗子町・葉山町・金沢町・六浦荘村」(1933年)
  - (e) 「横浜市中区」(1934年)
  - (f) 「**横浜市神奈川区**」(1934年)
  - (g) 「横浜市鶴見区」(1935年)
  - (h) 「横浜市中区・附磯子区」(1936年)
- 【参考文献】  
 地図資料編集会  
 『商工地図をよむ』昭和前期日本商工地図集成(第1期第2期)解題  
 柏書房(1988年)

だったが、スペースの都合で割愛せざるを得なかった。そこで本頁ではその全体図(縮小と部分図(原寸)を掲載し、読者にこ

覧いただきたいと思う。なお、神奈川区は1927(昭和2)年に、横浜市区に初めて行政区が設置された際に誕生し、

現在まで90年間存続する区の一つである。ただし、その区域は戦前・戦時期に若干の変更を経っており、本図は横浜駅周辺(現西

区)や綱島・小机地区(現港北区)などが神奈川区に含まれていた時期のものである。(岡田直)



1 「大日本職業別明細図 横浜市神奈川区」東京交通社(1934年)、石黒徹氏所蔵、全国、タテ55cm×ヨコ79cm



2 神奈川通り(京浜国道)周辺の部分



4 子安・大口地区周辺の部分



5 横浜駅周辺の部分



3 東神奈川駅から六角橋交差点にかけての部分

# 陸軍衛生兵の 従軍関係資料

## 岩田みどり氏寄贈



① 軍用救急車の前に立つ小島氏

戦後70年を過ぎ、戦争経験者から直接戦争体験を聞くことが困難になる中、戦時期の資料から得られる情報の価値は、より高くなっているといえる。本年、当館では新たに横浜市民の戦争経験を伝える資料の寄贈を受けた。本ページではその概要について紹介したい。

今回、寄贈を受けたのは、1918（大正7）年に横浜市神奈川区（現港北区）小机町に生まれ、陸軍衛生兵となつて戦地に赴いた小島武雄氏（1918～1995）<sup>①</sup>の資料である。小島氏は、日中戦争勃発後の1939（昭和14）年に徴兵されて中国の華北地域に出征し、山西省の太原陸軍病院に衛生兵として1942（昭和17）年まで勤務した。衛生兵とは、軍隊において医療に関わる任務に従事する兵士のことを指し、陸軍病院で勤務する衛生兵には、看護師並の看護学の知識や技術の習得が求められたが、資料の寄贈者である岩田みどり氏（小島氏の長女）によれば、小島氏は農家の家に生まれ、最終学歴は当時一般的であった尋常小学校卒であったため、医療の知識などは全くなかったのではないかと推測されている。小島氏は入隊後の教育で、短期間に看護の知識を習得していったと思われる。

できる。また、小島氏が所属していた部隊「乙第二八三五部隊佐久間隊」が発行した部隊誌<sup>④</sup>が残されており、本誌には、部隊員の名簿や月次日誌、隊員達による文芸作品などが収録されている。陸軍病院の勤務実態や衛生兵たちの心情を把握できる好資料と言えるだろう。さらに、寄贈写真のなかには、1942（昭和17年）に山西省で結成された神奈川県人会の記念写真<sup>⑤</sup>があり、遠い戦地で同郷人同士が助け合つて生活していた様子が偲ばれる。

小島氏は1942（昭和17）年11月に現役兵としての兵役を終え、無事帰国する。帰国後は東京芝浦電気株式会社（現・株式会社東芝）に勤めるが、戦局が悪化した1944（昭和19）年4月に臨時召集を受け、再度出征し河南省の新郷陸軍病院で勤務する。この後、1945（昭和20）年7月に本土防衛要員として朝鮮軍管区司令部に転属し、現朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の平壤市郊外の秋乙で終戦を迎え、ソ連陸軍直轄の三合里收容所（現平壤市寺洞区域大院子）に收容され、同所や秋乙（別名・栗里）收容所に設置された診療所で抑留生活を送ることになる。これらの收容所は当初、シベリアなどに日本軍捕虜を送る拠点として機能していたが、1946（昭和21）年より、厳しい抑留生活で衰弱した患者を受け入れる施設へと変化する。



② 衛生兵の勤務風景写真

收容所ではコレラなどが蔓延し、千数百名もの患者が死亡する悲劇が起こったことが、証言記録などから明らかになっている。三合里・秋乙收容所は1946（昭和21）年12月に閉鎖され、收容所の抑留者は順次帰国が許されたが、小島氏は重病者の治療のため、興南捕虜收容所（現朝鮮民主主義人民共和国咸興市興南区）に移り、1947（昭和22）年5月にソ連ナホトカ港より舞鶴港へ上陸して横浜に帰り、帰国後は株式会社東芝で労働衛生管理関係の勤務に従事した。寄贈資料には、小島氏より先に引き揚げた複数の三合里・秋乙收容所の同僚

が小島氏の家族に無事を知らせた書簡が複数あり、小島氏の抑留状況を知ることが出来る。そのうちの一通には以下のように記されている。

「前略」思へば終戦の年九月四日より北鮮部隊、満州部隊の二部は三合里收容所（平壤より約六里の山奥）に集結。收容所生活が始まりました時の兵数約三万、（其の内約九割はシベリア行）給養其の他の関係で患者が統発せし為、患者收容所を開設、要員として選抜され、以来病院と同様衛生勤務に従事して参りました。二十二年五月頃、部隊の移動に伴ひ栗里收容所に移動（平壤より約一里）同勤

この手紙からは、満足な食料・物資が与えられない中で、小島氏ら衛生部員が患者の治療に奔走していたことがうかがえる。小島氏が帰国した後も複数の抑留仲間から、抑留生活で世話になった礼を伝える礼状が届いているが、これも小島氏の活躍を偲ばせる資料である。

陸軍衛生兵として二度にわたり出征し、抑留生活を送つた小島氏の資料は、横浜市民の戦争体験を後世に伝える極めて貴重な資料群であるといえるだろう。

（西村 健）



③ 従軍看護婦との記念写真



④ 部隊誌「佐久間隊の思い出」



⑤ 山西省神奈川県人会創立総会記念写真